説教要旨　「富の奴隷か支配者か」

ルカによる福音書１６章１４～１８節

イエス様は『不正な管理人のたとえ』（16:1-13）を語り、弟子たちにこの姿を見倣えと言われました。その様子を見聞きしていた「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った」（14 節）のです。不正に不正を重ねることによって保身をはかる管理人の姿にあきれ、そのような者を見倣えと言うイエス様のことを非常識だと公衆の面前でバカにしたのです。そんな彼らに対して、イエス様はこう告げます。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである」（15 節）。自分の正しさを人に示そうとしているというのは、その自分の正しさを人生の拠り所としているということであり、それは自分の正しさの見返りを求めているのです。

人々が求める最終的な“見返り”。それが神の国に入ることです。ファリサイ派の人々は律法を厳格に守ることで神の国に入ることができると考え、人々にもそう教えていました。正しい者こそが認められ、恵みを与えられるべきなのであって、不正な者が恵みを与えられるようなことはあるべきではないというのが彼らの感覚なのです。そのような彼らにイエス様はこう言われています。「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力ずくでそこに入ろうとしている」（16 節）。

神の国の到来に備えて、過去の罪を悔い改め、律法に従って正しく生きようなんて悠長なことをいっていられる時代ではない。神の国はもう到来し始めている。罪深い者が神の国に入ろうとするならば、力ずくででもそこに入ろうとあがくしかない、そんな時代になっているのです。

『不正な管理人のたとえ』の管理人が、不正な手段を使って、なりふりかまわず自分の救いのために奔走する姿は、まさに“力ずくで”神の国に入ろうとする人間の姿です。もはや自分の正しさによって神の国に入ることは不可能です。しかしあの十字架に示された神様の力づくの愛によって、相応しくない私たちが、無理矢理に神の国に迎え入れられたのです。

（２０２０・１・２６　説教者：稲垣真実）